3月総評

西躰　かずよし

句読点なんてなかった
ふたりの心臓

こはくいろ　　大阪府

これが一人の心臓であったら物語ははじまっていなかっただろう。句読点の欠落は喪失ではなく、単なる欠落と感じられただろうから。ふたりと書くことで生まれた、世界からの追放の物語は、読み手に硬質な印象を与えるが、それはふたりが守ろうとしている何かが作品から読み取れるからだろう。

月面にかごめかごめの少女たち

玻璃　　愛媛県

かごめかごめは呪術的でどこか怖い。幼いころ、異界とこの世が地続きである気がしていたからかもしれない。ただ、この作品には、そうした異界は存在しない。かごめかごめの少女たちは既に月面にあって客観視できるものとしてある。僕たちは、もう迷信の失われた世界に生きていて、かごめかごめの歌い手にはなれないのかもしれない。

首を少し絞めれば石鹸の香り

西尾日月　　島根県

少しという条件が、この作品に現実味を与えている。石鹸の香りは戯れの際のものだろうか。それとも性愛の際のものだろうか。いずれにしても書き手は首を絞めた際の香りに何かを見つけたことだけは確かだと思う。

たとえば、生きる意味のようなもの。死ぬ意味のようなもの。

あかちゃんがやさしくにぎるての
ひらはようせいさんを
抱いてる証拠

うたた　　岡山県

赤ちゃんの手が妖精を抱いている証拠の拠りどころは書かれない。書かれないということは書く必要がなかったからだろう。書き手は、あかんぼうの存在を無条件に肯定しようとする。けれど無条件の肯定ほど欺瞞に満ちたものはない。たとえば僕たちは、アウシュヴィッツや原爆をすでに知ってしまっているから。
それでも抱いているという証拠を語りつづけることだけが、残された希望なのかもしれない。

ミラノ風ドリアを頼む風光る

浪花　小槙　　東京都

風光るという季語と、注文の描写だけの組み合わせだけれども、その際のわくわく感をうまく表している。ミラノ風ドリアという料理名には、サイゼリヤ、若年層、ファミリー層、といった多くの情報がつまっていて、読み手は様々な想像力を掻き立てられる。

コーラ瓶
透かした先に焼死体

秋山颯汰朗　　群馬県

書きぶりはどこかユーモラスだけれども、飛び込んでくる残酷な風景を明確に意識

しているようにも感じられる。ただ、手のなかのコーラ瓶と、その向こうにある焼死体との間には、絶対に届くことのない距離が感じられる。それは作品の全体を覆う無力感と無関係ではないかもしれない。

美術館のように匂えば春の森

azusa　　京都府

「匂えば」という一節から、いつの間にか春の森まで来てしまったかのような印象を受ける。作者は美術館によく行くのだろうか。たどり着く春の森は、きっと玉手箱のようなすてきな森であるに違いない。

三・一一おりづる瓶に詰められて

加那屋こあ　　東京都

2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災の災害関連死含む死者と行方不明者の数は 2 万 2,222 人にも上ったとされる（2024.3.11 時点）。未曽有の大災害から１３年以上が経過したけれども、当事者にあっては何一つ終わっていないだろう。

「詰められて」という一節が痛々しい。まだ何一つ終わっていないにもかかわらず、当事者以外にあっては、それは終わっていくものでしかない。生涯を尽くして寄り添ったとしても美化や風化は免れないだろう。瓶の中のおりづるは、死んでしまったものと生き残ってしまったものの埋めようのない落差を物語るかのようである。

戦争の話をする
君は美しい口の形で

桜望子　　山形県

「君は美しい口の形で」という一節によって、その話が、無味無臭でうつろなもの

のように感じられる。でもそれは決して、その語り手が軽薄だからではない。この作品は、僕たちはどのようにしても、美しい口のかたちでしか戦争の話を語れないことを表している。部外者以上には決してなれないことを。

一礼をするようにして雨宿り

有川　周志　　宮城県

雨宿りをする際にも一礼は欠かせないものであったのかもしれない。
生きてあることを詫びるために、それは必要であったのかもしれない。